

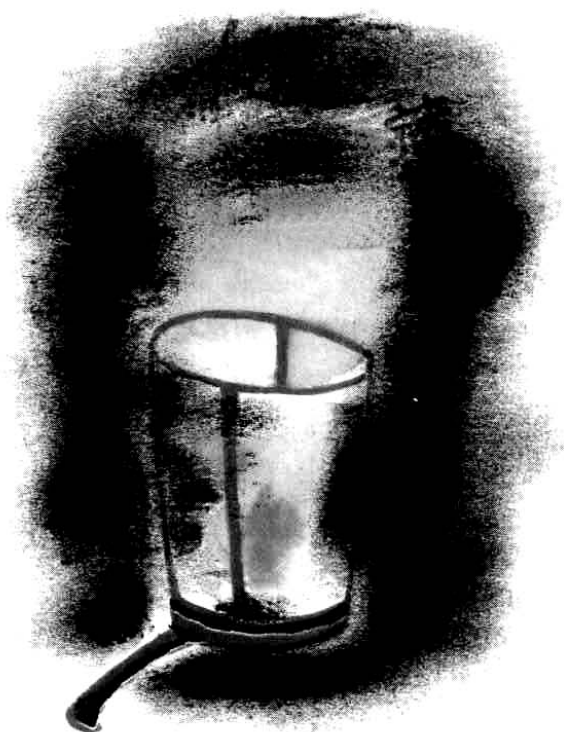
新鬼平犯科帳

炎の色

池波正太郎

新鬼平犯科帳

炎の色



文藝春秋

炎の色・新鬼平犯科帳

昭和六十二年五月十五日 第一刷
昭和六十二年六月二十日 第三刷

定価 一〇〇〇円

著者 池波正太郎

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©SHOTARO IKENAMI 1987 PRINTED IN JAPAN

ISBN4-16-309620-5

目次

隠し子

五

炎の色

四五

夜鴉の声

四六

囃(おとり)

八三

荒神のお夏

一三三

おまさとお園

一五八

盗みの季節

一九三

押し込みの夜

二三四

装釘装画
池波正太郎

炎の色

新鬼平犯科帳

隠かく
し
子こ

盗賊・猫間ねこまの重兵衛じゆうべえ一味いちみを向うにまわした難事件により、いったんは、火付盗賊改方かいにんを解任された長谷川平藏宣以のぶためが、再び復歸ふっきしたいきさつは、長篇「迷路」めいろの一篇にのべておいた。

この事件で、猫間一味を探索たんさくするため、長谷川平藏は頭を剃り、托鉢坊主たくはつぼうずに変装をした。その髪も、まだ伸びきらぬ春の或日のことであつたが、

「殿様。久助きゆうすけが見えましてございます。いかがいたしましょうか？」

妻の久栄ひさえが、居間にいた平藏へ告げたので、

「いかがも何もないではないか。此処ここへ通すがよい」

「でも……」

「でも？」

「ふふ、ふ……」

「何が、おかしい？」

「その、お頭つむりが……」

平蔵の髪は、総髪そうがみになってい、頸くびすじのあたりまで垂たれてはいるが、髻まげを結ゆうためには、いま少しの月日を必要とする。

「さぞ、久助が、おどろくことでございましょう」

「商売を替えて、陰陽師おんみょうじにでもなったと申しておくがよい」

「まあ……」

「何はともあれ、久しぶりじゃ。このところ一年の余よも顔を見せなかったのではないか？」

「はい。患わずらいついていたそうにございます」

「何と……」

おもわず、平蔵が腰を浮かせた。

「なれど、すっかり、よくなりましたそうで、血色けつしよくもよろしく見うけられまする」

「そうか……」

真しんから、ほっとした様子で、平蔵が、

「さ、早く、これへ……」

「承知いたしました」

久助は、むかし、長らく長谷川家に奉公をしていた小者（中間）であつたが、二十年ほど前に、
姪の許へ身を寄せることになり、長谷川家を去った。

というのは、姪のおたねの亭主が病死してしまったので、おたねが、
「ぜひとも、叔父さんに来てもらいたい」

と、いつてよこしたからだ。

おたねの亭主・由次郎は、板橋宿で古着屋をしていたが、二人の子供を残して死んでしまった
ので、おたね一人ではどうにもならぬ。そこで、叔父の久助に板橋へ来てもらい、引きつづいて
古着屋の商売をしてもらいたかったのだ。

久助は、

「女なんて獣は、もう真っ平でございますよ」

などといい、生涯、独身で通し、長谷川家に居ついて、

「殿様。私が、あの世へ行きましたら、御面倒でも、大川（隅田川）へ放り込んで下さいまし」

平蔵にたのんでいたほどだが、姪の難儀を捨てておくわけにもいかぬ。

そこで、暇を取り、姪の家へ引き移って行つたが、年に三度、四度は必ず長谷川家へあらわれ、
平蔵の機嫌をうかがうことを絶やさなかった。

久助は、当年七十五歳になる。

「此処へ来るときの行き帰りは、必ず、駕籠にするのだぞ、よいな」

と、平蔵は、久助が来るたびに金をあたえている。

居間へあらわれた久助は、ひとまわりほど躰からだが小さくなってしまったが、なるほど血色もよく、むかし、平蔵が、

「蜻蛉とんぼの化けもの」

などと評した、大きな眼玉めだまにも光りが在あって、

「おお、よく来てくれた。病やんでいたそうだが、その様子では、すっかり、よくなったようじゃな」

「はい。おかげさまで……」

まじまじと、平蔵の頭を見やった久助が、

「と、殿様。その、おつむりは？」

「むかしのような悪いさをした罰ばつに、女房どのに剃そられてしまったのじゃ」

「御冗談ごじやうだんを……」

「それよりも、病んだときは、なぜ知らせぬ。あれほど、常々つねづねに申しておいたではないか」

「はい、はい。もったいないことでございます。おそれいりましてございます」

平蔵に叱られ、久助は大きな眼玉から、たちまちに熱いものをながして鼻を噉すすった。急に、涙なみだもろくなつたようである。

それにしても、この日、久しぶりにあらわれた久助の様子が、いささか妙であった。

何かいいたいらしいが、いい出さぬ。いい出しかねている様子なのだ。

茶菓の仕度をして、居間へ入って来た久栄が、

「久助が、おいしそうな筍たけのこや独活うどを大きな籠かごいっぱい持って来てくれました」

「お前せめが背負おって来たのか？」

と、平蔵が久助へ、

「病やみあがりだというに、むりをするなよ」

「は、はい」

「すまぬのう。いや、かたじけない」

頭を下げると、久助が、また泣く。

ここで平蔵は、目顔めがおで久栄に、席を外はずすようにと知らせた。

心得た久栄が出て行くのを待ち、平蔵は亡父遺愛の銀煙管ぎんぎせるへ、しずかに煙草たばこをつめながら、

「これ、久助」

「は、はい……」

「おれと、お前の仲ではないか。何ぞ難儀なんぎのことあれば、遠慮なく申してみるのがよい」

「……………」

「これ、もう泣くなよ」

「も、申しわけも……」

「姪の身に何か起ったのか、それとも……？」

久助の姪は、もう四十をこえていて、二人の女の子もそれぞれに嫁ぎ、この前に久助が役宅へ来たときはなしでは、これといって異常がなかったはずだ。

「久助。お前らしくもない」

と、平蔵が、

「そう手古摺らせるな」

やや強い声でいうと、

「申しあげます。はい、申しあげますでございます」

「いまも申した通り、おれとお前の仲だ。よいか、よいな。ゆえに、いかな難儀があろうとも、おれが引き受けてやるから安心をしろ。さ、いつてみるがよい」

「実は、あの……」

「何だ？」

「実は、その……」

「じれったいやつだな。いつもの、お前にも似合^{にあ}わぬではないか」
すると久助が、面^{おもて}を伏せて、

「隠し子が……」

と、いうではないか。

「そうか。よし、わかった」

独身の上に、長谷川家へ奉公にあがるまでの若いころは、大分に放埒ほうらちをしてきたらしい久助だから、隠し子がいても、ふしぎなことはない。

「その、お前の隠し子が、どうした？」

「いえ、とんでもないことでございます。私の隠し子ではございません」

「では、だれのじゃ？」

「あの、それが……御先代様ごせんだいの……」

ここに至って、さすがの長谷川平蔵が呆氣あつけにとられた。

「な、亡き父上の隠し子……」

「はい」

寝耳に水とは、このことである。

あの謹直きんちよくで、温厚な父が、いつ、どこの女に子を産ませていたのであろう。

平蔵も妾腹の子になってはいるが、これは父が、長谷川家の跡あとをつぐつもりではなかったからだ。父は行く行く、平蔵の生母を妻にするつもりで、ねんごろになった。

その後、やむなく長谷川の本家をつぐことになり、親類一同にせまられ、仕方もなく姪めい（兄の娘）の波津はつと結婚をする羽目はめになってしまった。

したがって波津が、亡父・宣雄のぶおの正夫人ということになる。

「それで……」

いいさした長谷川平蔵が、冷えた茶を一口のんでから、声を低め、

「父の隠し子は、女か男か？」

「女の、お子でございます」

二

本郷の根津権現の社は、宝永三年（西暦一七〇六年）に建立されたが、祭神の素戔鳴尊は六代將軍家宣の産土神ということで、徳川幕府も造営にはちからを入れ、壮麗な社殿、堂宇が竣工した。

このような神社の門前が賑わうのは当然で、物の本に、

「当社の境内は築山、泉水等をかまえ、草木の花、四季を逐て絶えず。まことに遊観の地なり。ことに門前には貨食店などが軒をならべて参詣の人びとを憩わしめ、酩酊の聲、間断なし」と、ある。

そうなれば、これまた当然のように、岡場所（官許以外の娼婦を置いた遊里）が発生する。

いまの根津の岡場所は、幕府公認の新吉原以外の、品川、新宿、板橋、千住、深川とならぶ繁昌ぶりを見せている。

父の隠し子が、その根津権現の門前町にいと、久助が告げたものだから、さすがの長谷川平蔵も顔色を変え、膝を乗り出すようにして、

「では、駄を売っているのか？」

「いえ、いえ……」

久助は、あわてて手を振り、

「それどころか、もう、三十になるというのに、男知らずなのでございます」

「ふうむ……」

平蔵にとっては、おもいもかけぬ「腹ちがいの妹」が急に出現したのである。

「久助。何故、いままで、わしに黙っていたのじゃ？」

「も、申しわけもございません。なれど、これは、御先代様が堅く口止めをなさいましたので

……」

「父上も父上じゃ」

と、平蔵が苦笑いを浮かべて、

「この倅が、並の倅でないことを、よく御存知のはずであつたのに、な」

「は、はい」

「久助もそうではないか。若いころの、わしの放埒な行状を、いちばんよく知っていたのはお前じゃ。腹ちがいの妹や弟の一人や二人、出て来たところで、おどろく平蔵ではないわ」

「それをうかがって、あ、安心をいたしましたしてございます」

久助は、泪と共に顔に浮いた冷汗をしきりにぬぐう。